

楊雄「蜀都賦」と都邑賦

嘉瀬達男

辭賦は漢代に盛行した文学様式であり、中でも都邑を主題とする大賦は、辭賦文学を代表する一群をなしている。かの『文選』の冒頭を飾る分類が京都賦であることも、この主題がいかに重視されていたかを示している。この都邑賦劈頭の作とされるのが楊雄（前五三―後一八）の「蜀都賦」である。この作品は蜀の都、成都の宏大雄偉にして繁榮する様を詠う大作である。ところが作品の真偽について疑義が出されている上、全文は遺っていない。表現も難解な部分が多いため、これまで十分に検討されてこなかった。筆者は先に「楊雄「蜀都賦」譯注」（『學林』五一号、二〇一〇年、中国芸文研究会）を発表し、「蜀都賦」全文を校訂の上、注釈を施し、訓読と現代語訳を行なった。そこでこの成果に基づき、「蜀都賦」のもつ意義について考えたい。

一 「蜀都賦」の真偽について

まず「蜀都賦」の真偽について質しておこう。「蜀都賦」が偽作である可能性を言う根拠はいくつかある。まず、現存する「蜀都賦」を収録するのが『古文苑』であり、『古文苑』は偽作を収めた書と疑われていること。「蜀都賦」に関する言及が、『漢書』楊雄伝や芸文志ほかに見えないこと。また京都賦の作者に影響を与えているにも関わらず、彼らからの言及のないこと等が指摘されている。

こうした問題について熊良智「揚雄『蜀都賦』釋疑」(『文獻』二〇一〇年一期、书目文献出版社)は、「蜀都賦」の一部が『古文苑』以前の西晋から唐代の古注や類書に多く引用されていること、北斉の司馬膺之が揚雄「蜀都賦」に注を加えたと伝えられていること、また韻字を通押させる状況が揚雄の他の作品や蜀方言と一致することなどを挙げ、「蜀都賦」が楊雄の真作であることに疑いはないと断じている。

「蜀都賦」を引用する文献について、熊氏の説を補うべく筆者の調査したところ、宋代までに「蜀都賦」を引用する書物として以下のものが見出せた。

『後漢書』王符伝李賢等注。

『宋書』謝靈運伝所引「山居賦」自注。

『水経注』江水一。

『北堂書紗』卷一四二、卷一五四。

『芸文類聚』卷六一。

『太平御覧』卷一五六、卷七五六、卷八二〇、卷九六六、卷九七七。

『事類賦』卷二七。

『玉海』卷二四、卷一五一、卷一六九。

『李善注文選』班固「西都賦」、張衡「西京賦」同「南都賦」、左思「蜀都賦」、同「呉都賦」、同「魏都賦」、鮑照「蕪城賦」、郭璞「江賦」、沈約「鍾山詩応西陽王教詩」、謝靈運「入華子崗是麻源第三谷詩」、曹植「七啓」、顔延之「三月三日曲水詩序」、王融「三月三日曲水詩序」、劉孝標「広絶交論」

そして上記諸書に引用された楊雄「蜀都賦」を取り出すと、次の四六六字となる（…と…の間に示したアラビア数字は、『古文苑』にあるが上記諸書に引用のない文字の数）。

蜀都之地、古曰梁州。禹治其江、滄臯彌望、鬱乎青葱…42…玉石簪岑、丹青玲瓏…4…石鱗水螭…29…於近則有瑕英菌芝、玉石江珠。於遠則有銀鉛錫碧、馬犀象麋。西有鹽泉鐵冶、橋林銅陵…8…其旁則有期牛犛旄、金馬碧雞…41…蒼山隱天…16…霜雪終夏…12…五硯參差…32…彭門嶋峽…16…北屬崑崙…137…分川並注、合乎江州…65…其竹則…8…宗生族攢、俊茂豐美…12…夾江緣山、尋卒而起…65…其深則有獼獼沈鯉、水豹蛟蛇…8…蚌含珠而擊裂…2…其都門二九、四百餘閭。兩江珥其市、九橋帶其流…24…秦漢之徒、元以山東…10…苴竹。浮流龜鼈、竹石…11…風胎雨霰。衆物駭目…41…樹以木蘭…76…百華投春、隆隱芬芳、蔓茗葵郁、翠紫青黃、麗靡擗燭、若揮錦布繡、望芒芒兮無幅…24…其布則細都弱折、綿繭成衽…8…蜘蛛作絲、不可見風、箛中黃潤、一端數金。雕鏤鉦器、百伎千工…15…方轅齊鞞、隱軫幽輶…87…乃使有伊之徒、調夫五味、甘甜之和、勺藥之羹。江東鮓鮑、隴西牛羊。糴米肥膾、麇麇不行。鴻獠獠乳、獨竹孤鶴、炮鴉、被紕之胎、山麇髓腦、水遊之腴、蜂豚應鳩、被鳩晨鳧、戮鴟初乳、山鶴既交、春羔秋聊、膾鯪龜肴。杭田孺鶯、形不及勞、五肉七菜、臙獸腥臊。可以練神養血脈者、莫不畢陳…2…其俗、迎春送冬、百金之家、千金之公…8…若其吉日嘉會、期於送春之陰、迎夏之陽…8…置酒乎榮川之閨宅、設坐乎華都之高堂。延帷揚幕、接帳連岡…115…眺朱顏離絳脣…8…若其遊意魚弋、郊公之徒、相與如平陽、頰巨沼、羅車百乘、期會投宿。觀者方隄、行船競逐…52…。

『古文苑』が収録する「蜀都賦」は一四五二字であるから、この調査に拠れば三分の一程度が『古文苑』以外の

宋代以前の書物に引用されていることになる。中には百字以上連続して引用を欠く部分もあるが、引用は全体からほぼ満遍なくなされており、全篇の構成を概ね保っている。

引用された文献を見てみると、多くは晋代以降の書物である。その中で最も古いのは『李善注文選』所収張衡「西京賦」の注である。張衡（七八―一三九）「西京賦」の注には李善が薛綜の注を一部用いており、その中に楊雄「蜀都賦」が引用されている。薛綜は三国呉に仕えた人物で、二四三年に没しているから、張衡「西京賦」薛綜注が楊雄「蜀都賦」を引く最も古い文献になる。

ただし、右に挙げたように宋代以前の書物に何度も引用されているから「蜀都賦」はまちがいになく楊雄の真作である、とするのも早急であろう。楊雄が没した一八年以後、薛綜が注に引用するまでの二百年以上もの間、楊雄「蜀都賦」についていかなる言及も見当たらないのは不審なことである。

楊雄の辞賦作品については、『漢書』芸文志・詩賦略に「揚雄賦十二篇」との記述が見える。ただし漢志・詩賦略・陸賈賦の属の末尾には「入揚雄八篇」と班固自注があるから、劉向・劉歆が『別録』『七略』を編纂した当初、楊雄賦の著録は四篇であった。ところが『漢書』芸文志に言う「揚雄賦十二篇」の篇名が全て明確なわけではない。その中に『漢書』楊雄伝に引かれる四大賦「甘泉賦」「河東賦」「校獵賦」「長楊賦」が含まれることはまちがないが、ほかに『漢書』に名が見える「反離騷」「広騷」「畔牢愁」や「解嘲」「解難」「酒賦」、『古文苑』に収められる「太玄賦」「蜀都賦」「逐貧賦」ほか、佚句が伝わる「覈靈賦」もその可能性が考えられる。しかし「広騷」「畔牢愁」は散佚し、「覈靈賦」は佚句のみであり、「太玄賦」は偽作の可能性がある。このように後漢の頃には既に楊雄の辞賦作品は混乱を来していた。

更に言えば、前漢の辞賦作品は現在ではその大半が失われている。『漢書』芸文志・詩賦略には合計千四篇が著録されているが、現在伝わっているのは、佚句や篇名のみ伝わるものを含めても七十篇前後である。実に九百篇あ

まりが篇名さえ失われているのである。いま読むことができるのは、著録された篇数のわずか五%に過ぎない。こうした状況を考えれば、「蜀都賦」への言及が二百年以上の間見ええず、「揚雄賦十二篇」に数えられていたかどうか不明なことは、決して不自然なこととは言えまい。むしろ楊雄の作品は、他の作家に比べてその多くが伝わっているとさえ見なせよう。

以上の検討結果をまとめると、「蜀都賦」の『古文苑』以外の宋代以前の書物に引用された部分は、楊雄の作品であると考えて差し支えないと思われる。そして『古文苑』も近年の研究によって収録作品への信頼が回復されつつあることから、『古文苑』のみが収録する部分をみだりに疑うことも慎みたいと思う。

二 「蜀都賦」と都邑賦

次に楊雄「蜀都賦」の内容を確認し、文学史上での位置づけについて検討したい。前節に示した『古文苑』以外の書物に引用された部分を一瞥すると、「蜀都賦」に述べられる内容は、蜀という地域、都市の概況であり、産物や景観、生活や物品である。そしてそれらがいかに漢賦らしい物づくし表現によって描写されている。特に物づくしによって列挙されるのは、魼物、動物、魚類、山脈、河川、竹林、海獣、門、橋、樹木、花卉、布帛、珍珠佳肴、節日の嘉会催事といった類であり、蜀に見られる稀少な種名や品名などを数え上げ、詳細な描写を繰り広げている。

この「蜀都賦」は、小論冒頭に述べた通り、国都や地方都市を主題とする都邑賦の先駆けとする評価がなされてきた。たとえば郭維森・許結『中國辭賦發展史』は、「蜀都賦」を最も早い都邑賦と位置づけ、王青『揚雄評伝』も京都賦の先駆けであると言う⁶。更に簡宗梧『漢賦史論』や高一农「兩漢都邑賦述論」に至っては、前漢唯一の京都賦として、漢賦の題材に新たな領域を開いたものときわめて高く評価している⁷。

確かに前漢において都邑を主題とする大賦は、楊雄「蜀都賦」のほかに遺されていない。後漢以後、班固「兩都賦」、張衡「兩京賦」、左思「三都賦」といった大作が相継いで生み出されたので、楊雄「蜀都賦」をこれら一連の名作に先立つ作品と位置づけることに異論はない。しかし「蜀都賦」に新たな領域を開いた都邑賦の濫觴とまで高い評価を与えることについては、少しく慎重でありたい。なぜなら模倣作家と呼ばれ、過半の作品が何らかの粉本をもつ楊雄の作品にあって、「蜀都賦」がこれまでにない領域を開いた作と断ずるからには、相応の根拠が必要であると考えるからである。また、都邑賦といえども突然に発明された筈はないので、何らかの関連作品や先行作品を見出すことは可能なことと思われる。そこで次には「蜀都賦」に先行し、また関連する作品を文学史上に尋ね、都邑賦の淵源を探つてみたい。

まず「蜀都賦」の内容や表現に影響を与えた先行作品として、司馬相如（前一七九〜前一一七）「子虚・上林の賦」が指摘されている。司馬相如「子虚・上林の賦」は、雲夢沢と上林苑のさまを描写して余すところなく、特にものづくし表現を用いる点が「蜀都賦」に継承されていると、しばしば言われてきた。また、風物を主題の一つとする点も「蜀都賦」に近い。しかし「子虚・上林の賦」は、問答体を用い、虚構を交え、芝居がかった娛樂性をもつ点、「蜀都賦」とは大きく異なっている。内容も雲夢沢・上林苑の叙景表現より狩獵場面を活写することに主眼が置かれている。「子虚・上林の賦」は都邑賦とは方向性が異なり、いささか隔たりがあるとすべきであろう。

「蜀都賦」を京都賦の先駆けとする論者のあることを既に述べたが、そもそも「蜀都賦」は、題名に「蜀都」と冠してはいても、「蜀都」すなわち成都は前漢当時、地方の一都市に過ぎない。国都に比肩するような漢中の大都市とは異なる。前漢二百年の間に成都と長安との行き来は増えたものの、当時の蜀はなお後進地域であった。前漢中期にあって司馬相如が蜀の開発に腐心したことは、『史記』司馬相如伝に詳細に記されている。それに対し京都賦である「兩都賦」「兩京賦」は、長安と洛陽の優劣を論じ、国家問題であった遷都論を説く。そして「三都賦」

は三国期それぞれの国都を活写する。これらの作品に比べ、楊雄「蜀都賦」が規模の上で見劣りすることは否めないのである。

「蜀都賦」同様に地方都市名を題名とする辞賦として、後漢前期には班彪（三〇―五四）「冀州賦」、中期には張衡「南都賦」がある。「冀州賦」は、『水経注』卷九、『芸文類聚』卷六・卷二八ほかに二百字余りを見出すことができる佚文である。冀州（現在の河北省・山西省周辺）に赴くこととなり、思い浮かぶことどもを詠う、叙情的な内容である。篇名を「游居賦」とする文献もあり、また班彪が冀州に赴いた形跡のない点からも、地方都市を様々な角度より描写する都邑賦とは距離がありそうである。

張衡「南都賦」は『文選』卷四に収められ、楊雄「蜀都賦」に非常に近い構成・内容をもつ作品である。作者張衡の郷里南陽（現在の河南省南陽市）を頌えるのに、「蜀都賦」同様に地域、都市の概況、産物や景観、生活や物品を物づくし表現によつて描写する。列挙されるのも、鉱物、動物、魚類、山脈、河川、竹林、海獣、樹木、花卉、珍味佳肴など、ほぼ「蜀都賦」に重なる。また語彙の面でも「蜀都賦」と重なる語は非常に多く、筆者の「楊雄「蜀都賦」譯注」でも注で指摘した。ただし後半部になると両作の違いは際立っている。「南都賦」は、酒宴の描写が委曲を尽くしており、狩猟場面を描き、そして南陽の出身である光武帝を頌え、行幸を求めている。「南都賦」の中心が後半にあると考えるなら、「蜀都賦」より一步踏み出した都邑賦と言える。

以上の作品のほかに「蜀都賦」に前後する時期の地方都市を詠った辞賦は見出せない。ただし少しく題材の範囲を広げ、地方の都市ではなく、山陵や園囿など風景を描く叙景賦を探してみると、少なからぬ作品を見ることができ。たとえば枚乘（？―前一四〇）「梁王菟園賦」、司馬相如「梓桐山賦」、杜篤（？―七二）「首陽山賦」、班固（三二―九二）「終南山賦」などである。これらの作品はいずれも佚文であり、完全には遺っていない。「梁王菟園賦」は「古文苑」卷三に五百字ほど収められ、「梓桐山賦」は『玉篇』卷二二に二字のみ記されている。「首陽山

「賦」は『芸文類聚』巻七、「終南山賦」は『初学記』巻五に、それぞれ二百字前後が録されている。それぞれ各地の山陵や園囿の描写を内容としている。

このほかに『漢書』芸文志・詩賦略・雜賦を見ると、「雜山陵水泡雲氣雨旱賦十六篇」が録されており、沈欽韓『漢書疏証』はこの条に、「『古文苑』有董仲舒「山川頌。」と注している。董仲舒「山川頌」は『古文苑』巻十二のほか、『春秋繁露』巻十六に収められており、山陵と河川を詠む頌辭である。頌は賦と性質が近く、しばしば題名においても通用されるため、沈欽韓は「山川頌」を山陵・水泡を詠う賦に数えたのであろう。「雜山陵水泡雲氣雨旱賦」は十六篇であるから、その中には董仲舒の作の他にも山陵賦のあったことと思われる。同じく詩賦略・雜賦には「雜四夷及兵賦二十篇」という著録もある。その名から東西南北の異域の景物も辭賦の題材として取り入れられていたことが推量される。そしてこの詩賦略・雜賦に「雜都邑賦」や「雜京都賦」といった著録の存しないことから、前漢において都邑賦・京都賦はそれほど多く制作されていなかったこともわかる。『隋書』経籍志になつて「雜都賦十一卷」が著録されるのである。

「蜀都賦」に先行する都邑賦が見出し難いとすれば、叙景賦を都邑賦の淵源の一つと考えてよからう。叙景賦は内容・主題が山陵や園囿に限定されるものの、叙景表現を積み重ねて全体を構成する点が一致する。「蜀都賦」について述べた通り、都邑賦は地域・都市の概況を説き、産物や景観、生活や物品について描写を重ねていく。叙景賦も地域の概況、景観、産物について描き出すから、都邑賦の一部分をなしうるものである。叙景賦に欠けるのは、都市の活況や人々の生活を描く部分である。この部分を新たに加えたのが都邑賦の特色であると言える。そして都市の描き方を見ると、そこには都市の繁栄を誇り、都会生活の愉悅を述べる都市称讚の辭が繰り返されている。叙景賦にはないが、都邑賦・京都賦の特色である都市称讚の辭をもつ点、「蜀都賦」については既に指摘がある。そこで次に「蜀都賦」の頌辭としての性格について考えてみたい。

三、「蜀都賦」と楊雄の頌辭

「蜀都賦」について、楊雄が郷里の蜀を称讚する頌辭としての性格を重視する評価は、葉幼明『新譚揚子雲集』や林貞愛『揚雄集校注』に見える。両著は「蜀都賦」を、蜀の形勝、物産、生活を描き出し、蜀地の魅力を称えるものとする。¹¹「蜀都賦」を平靜に読めば、この評価は至極妥当なものと思われる。この作品には蜀の魅力を説く言辭が羅列されるばかりで、諷諫や批判的な語が全く見出せないからである。

「蜀都賦」が頌辭としての性格の色濃くもつことは、前述の通り辭賦と頌の性格が時として非常に近いと考えられていることを考え合わせるなら、極めて自然なことである。ここでは更に、楊雄が成都にほど近い広漢郡の綿竹という街について、頌を制作していたことに注目したい。「綿竹頌」は佚しているが、『文選』甘泉賦の作者名に付された李周翰注に次のように記されている。

楊雄家貧好學、每制作、慕相如之文。嘗作「緜竹頌」。成帝時、直宿郎楊莊誦此文。帝曰「此似相如之文。」
莊曰「非也。此臣邑人楊子雲。」帝即召見拜爲黃門侍郎。

楊雄家貧しく學を好み、制作する毎に、相如の文を慕ふ。嘗て「緜竹頌」を作る。成帝の時、直宿郎楊莊此の文を誦す。帝曰はく「此れ相如の文に似たり」と。莊曰はく「非なり。此れ臣の邑人楊子雲なり」と。帝即ち召見して拜して黃門侍郎と爲す。

この文によると、楊雄が作った「綿竹頌」を楊莊なる人物が朗誦したのに成帝が関心を示し、楊雄を引見するに至ったことになる。この一件、ことの真偽は定かではないが、少なくとも楊雄が上京する前に綿竹をたたえる頌を作っていたらしいことが知られる。楊莊は楊雄と同邑であると言うから「綿竹頌」は、蜀でもよく朗誦されたので

あろう。頌は辭賦と性格が近いから、「蜀都賦」もこの「綿竹頌」に似た性格をもつ作品だったのではあるまいか。龔克昌他『全漢賦評注』も、楊雄「蜀都賦」についてこの李周翰注を引き、「蜀都賦」を「綿竹頌」と同時期の「歌頌之賦」と断じている。¹²

ここで更に想起されるのは、楊雄が上京前、蜀に在って「蜀」や「綿竹」のほか郷里について作っていた作品である。「答劉歆書」に「成都城四隅銘」を作ったと見えるのがそれである。「成都城四隅銘」も佚して伝わらないが、題名から推して成都の都城に対する銘文である。四隅それぞれに対して作られたのかもしれない。銘という文体にも様々あるが、¹³成都城とあるから器物銘や室銘ではなく山川銘の類であろう。そこには成都城を称讚する辭が含まれたに違いない。

こうして見ると楊雄は、「蜀都賦」「綿竹頌」「成都城四隅銘」と郷里を称讚する辭を様々な文体で制作していたことがわかる。内容の多寡や文辭の長短、その目的によつて文体を使い分けた可能性も考えられる。更にはこのような叙景文の制作が、後の「十二州箴」作成へと展開した可能性をも指摘できよう。

四、都邑賦・叙景賦の作者と読者

以上のように京都賦を離れて地方都市や叙景の賦に目を移すと、「蜀都賦」の頌辭としての性格がより明確になる。「蜀都賦」が本来有した性格として、作者が蜀という一地方に在って郷里を称讚した作品であるという点が認められるならば、次には蜀のような地方都市で行なわれた文学者の活動への注意が求められよう。以下ではいくつかの地方について都邑賦・叙景賦の制作された可能性について探ってみよう。

まず、蜀出身の作家には司馬相如、王褒、楊雄がおり、『漢書』芸文志にはそれぞれ二十九篇、十六篇、十二篇が著録されている。蜀は一地方都市でありながら辭賦作家を排出した地域である。三人は、それぞれそれぞれ後を

追うように現れ、世を異にしている。¹⁴

蜀のほかには辞賦を中心とする文学作品の量産された地方として知られるのは、呉と梁である。『漢書』地理志・下に拠れば、呉の寿春・合肥には屈原が放逐され、宋玉・唐勒がこれを慕ったと言い、後に呉王濞（前二一五〜前一五四）が治めると、枚乗や鄒陽・嚴夫子（莊忌）らの作家を招いて文学集団が形成された。更に淮南王劉安（前一七九〜前一二二）も寿春を都として賓客を招き、書物を著わしたと言う。¹⁵この地域は『楚辭』をよく受け継ぎ、多数の作家が集った場所と言えよう。寿春・合肥は現在の安徽省の六安市・合肥市に当たる。『漢書』芸文志には屈原賦二五篇、唐勒賦四篇、宋玉賦十六篇、枚乗賦九篇、莊忌賦二四篇、淮南王賦八二篇、淮南王群臣賦四四篇があつたと記されている。

梁（現在の山東省西部から河南省東部）にはまず呉王濞の下にいた枚乗・鄒陽・莊忌らが集った。彼らは呉王濞に謀叛の意図あるを察し、梁孝王（前一八六〜前一四四）の下を訪れたのである。この文学集団を慕い、後に司馬相如も梁に赴いている。¹⁶

以上に列挙した作家について『漢書』芸文志が詩賦略に著録した辞賦の数を合計してみると、蜀の作家は三家五七篇、呉が七家二〇四篇である。漢志・詩賦略所収の辞賦は七八家千四篇であるから、蜀と呉の十家で四分の一の篇数を占めていることになる。先秦の作として屈原・唐勒・宋玉の作四五篇を除いても、二百篇を下らない。漢代辞賦と言えは、宮廷文学として皇帝に献上された作品ばかりが思い浮かぶが、地方における創作活動も旺盛であつた様子がここに見てとれよう。

しかしそのことよりも、漢代の辞賦作品として宮廷文学としての作ばかりが思い浮かぶ理由こそ、注意すべきであろう。それは宮廷文学作品ばかりが後世によく伝えられ、地方での作品が失われたからにはかなるまい。たとえば司馬相如、王褒、楊雄、枚乗・鄒陽・莊忌、淮南王劉安および淮南王群臣らの現存する作品を見てみるなら、そ

のほとんどが宮廷での作品である。あるいは彼らの代表作はいずれも皇帝に献上された作品であったと言うべきかもしれない。そしてそれ以外の作は佚文が多く、漢志に著録された二〇七篇のうち、今に伝わるのは三十篇に満たない。一方、地方で作られた作は、小論で言及した「梁王菟園賦」「梓桐山賦」「蜀都賦」「綿竹頌」「成都城四隅銘」などのように佚文ばかりで、断片が今に伝えられているに過ぎない。これまでの検討によつて、地方で制作された文学作品の多数であったことが予想されたが、同時にその実態を究明することの困難も痛感させられる。¹⁷ 残念なことではあるが、今は漢志に録されながらも後に失われた百七十数篇の辞賦の中に、都邑賦もしくは叙景の賦の存した可能性を指摘するに止めたい。

最後に、いま一度楊雄「蜀都賦」に立ち戻り、作品制作の目的について再考したい。「蜀都賦」の主題、制作目的が郷土称讃にあることは既に述べた。また、「綿竹頌」「成都城四隅銘」とともに、蜀で作られたとも考えた。ならばこの作品の読者・聞き手は誰であろう。蜀にあつて蜀への賛歌を求め、喜ぶとしたら、「蜀都賦」の中にも見える蜀の富豪や権勢家だつたのではあるまいか。彼らは宮廷において献上された辞賦を喜ぶ皇帝のような人物、あるいはそれを気取つた人物である。枚乘より「梁王菟園賦」を献上された梁孝王もよく似た立場にあつた。「蜀都賦」も、「蜀都賦」に描かれたような宴席の場で披露されたように思われるのだがいかがであろう。そうであるならば「蜀都賦」という作品は、作り手も受け手も郷土を誇り、讃辞に気を高ぶらせる地方の人々の意識、つまりは郷土愛の高まりを示しているようである。

「蜀都賦」のような地方文学作品は、まずは地元蜀の人々の間に広まり、楊莊が「綿竹頌」の一節を朗誦したように、後には朗誦されて都長安に伝わるがあつたかもしれない。また、作者が上京後に改めて長安の人士に示すこともありえる。しかし都の人々には、「蜀」という土地の案内記（中島千秋『賦の成立と展開』前出）と受け止められたのかもしれない。後に左思（二五〇？～三〇五？）が、楊雄「蜀都賦」に倣い、同名の「蜀都賦」を著し

た。「魏都賦」「吳都賦」と合わせ左思の「三都の賦」は、京都賦の流れを汲む大作であり、洛陽の紙価を高からしめた。しかし斉の人左思の「蜀都賦」に蜀への郷土愛を読み取ることは困難なのである。

注

1 方銘『揚雄賦論』（『中国文学研究』一九九一年一期、湖南师范大学）は、「蜀都賦」について『漢書』揚雄伝を含め当時の言及がないこと、後に左思も「蜀都賦」を作っていないながら揚雄「蜀都賦」にふれていない事から偽作の可能性が高いと考える。王青『揚雄評伝』（二〇〇〇年、南京大学出版社）第六章第二节、「揚雄の大賦」（二六六―二六九頁）は、「蜀都賦」の真偽問題にふれた中で、『古文苑』収録作品には偽作が多く、「蜀都賦」もその疑いがあると言う。郑文『揚雄文集箋注』前言（三〇頁、二〇〇〇年、巴蜀书社）は、収録するのが『古文苑』であるからあまり信用できないと述べ、同書では「蜀都賦」を本文に収めず、附録としている。

2 『北齊書』司馬膺之伝に「好讀『太玄經』、又注揚雄『蜀都賦』。每云『我欲與揚子雲周旋。』」とある。

3 「揚雄賦十二篇」について兪紀東『漢志・詩賦略』揚雄賦「绎释」（『复旦学报（社会科学版）』二〇〇二年第三期）は、「甘泉賦」「河東賦」「校獵賦」「長楊賦」「反離騷」「広騷」「畔牢愁」「解嘲」「解難」「酒賦（酒箴）」「趙充国頌」及び「玉卮頌」か「綿竹頌」のどちらかと考えている。

4 龚克昌等『全漢賦評注』（二〇〇三年、花山文艺出版社）には前漢部分の作として六七篇、費振剛等『全漢賦校注』（二〇〇五年、廣東教育出版社）は七三篇を収録している。

5 阿部順子『古文苑』の成書年代とその出處』（二〇〇一年、『日本中国学会報』五三号）、王晓鵬『《古文苑》論稿』（二〇一〇年、人民出版社）など。

6 郭維森・許結『中國辭賦發展史』（一九九六年、江蘇教育出版社、第三章三節三、都邑賦與宮觀賦的興起、一五一頁）は「今存最早の都邑賦は揚雄的《蜀都賦》、賦中寫了蜀地交通不便、與外地隔絕、然其山川形勝物產豐饒、有足誇耀者。」と述べ、王青『揚雄評傳』（前出、二六六頁）は「這篇作于入京之前的大賦虽有模仿司马相如的痕迹、但在賦史上的地位

也不容忽视。它专写蜀郡成都，开了后来京都大邑赋的先河。」と言う。

7 簡宗梧『漢賦史論』（一九九三年、東大圖書公司、一五九頁）は、「京都是漢賦的主要題材、不過寫京都的賦篇是大盛於東漢以後……在西漢之世、寫都城的賦篇、就只有揚雄的〈蜀都賦〉了。所以他的〈蜀都賦〉、不但開風氣之先、爲漢賦題材開發新領域、也爲以後左思〈蜀都賦〉所本、因此就賦史而言、它自有其重要地位。」と言う。高一农「兩漢都邑賦述論」（『文學遺產』二〇〇二年第六期、『文學遺產』編輯部）は、「蜀都賦」について「這篇賦虽是偶一为之、但在汉代都邑賦的创作演进过程中具有首开以都邑为创作题材先例的功绩、成为『都邑賦』的濫觴。」と言う。

8 中島千秋『賦の成立と展開』（一九六三年、関洋紙店印刷所）は、「蜀都賦」について「こうした物づくしの列挙は「子虚、上林の賦」と同じで、楚の雲夢や上林苑をうたうのと同じ調子である。」と述べている（第五章四節、而都賦の系統、三八七頁）。王青「揚雄評傳」も「有模仿司馬相如的痕迹、但在賦史上的地位也不容忽视。」と言う（本稿、注6参照）。

9 司馬相如「梓桐山賦」は、『玉篇』卷二二「礪」字条に「司馬相如「梓桐山賦」云「礪礪。」とある。梓桐山は、蜀に隣接する広漢郡の梓潼山のことであろう（毕庶春「司馬相如巴蜀行迹考論」、『辽东学院学报（社会科学版）』十卷五期、二〇〇八年）。「礪礪」という語は山の貌と『集韻』卷六・礪にあるから、「梓桐山賦」が山容を描写していたことが察せられる。

10 万光治『汉賦通論（増訂本）』（二〇〇四年、中国社会科学出版社）は、「第六章・汉代颂赞箴铭与賦同体异用」を立て、その第一に「頌」と「賦」の近いことを詳述している。

11 葉幼明『新譯揚子雲集』（一九九七年、三民書局、三頁）は、「〈蜀都賦〉就是描寫蜀都。賦中、描述了蜀都的地理位置、山川形勝；讚美了蜀都的物產豐富、貿易發達、風俗淳厚、人們生活富裕愉快；表現了作者揚雄對其家鄉山水人情的熱愛與讚頌。」と言う。林貞愛「揚雄集校注」（二〇〇一年、四川大学出版社、五頁）は、「它（筆者注：蜀都賦）描繪了蜀国的形成及其歷史變遷、蜀都的歷史沿革及其地理環境、蜀地的風土人情及其生活習俗、最後以魚弋郤公之徒的游獵之樂收尾。歌頌了蜀国的富饒美麗、山河的奇偉壯觀、物產的極大豐富、品種的獨特繁多、蠶桑業的悠久歷史、蜀錦的名貴及工藝的精美、人民的勤勞智慧、風俗的純樸敦厚等。」と言う。

- 12 龚克昌他『全汉赋评注』（前出、二八三・四頁）に「《文选・甘泉赋》李周翰注也说「杨雄家贫好学、每制作、慕相如之文、尝作《绵竹颂》。成帝时、夜郎杨庄诵此文、帝曰「此似相如之文。」庄曰「非也。此邑人扬子云。」帝即召见、拜为黄门侍郎。」可见、扬雄在离开蜀成都之前、慕乡人司马相如辞采、写了一些颂扬家乡的作品、《蜀都赋》也当作于此时。
- 13 《蜀都赋》与扬雄于元延元年到京师为郎后大写讽谏的倾向大不相同、此赋纯属歌颂之赋。」とある。
- 13 褚斌杰『中国古代文体概论（增订本）』（一九九〇年、北京大学出版社、十一章六节・箴铭文）に詳しい。また釜谷武志「漢魏六朝における「銘」」（『中国文学報』四十、一九八九年、京都大学文学部中国語学中国文学研究室）は、銘・頌・箴の類似を論じている。
- 14 生卒年を示すと、司馬相如は前一七九〜前一七、王褒は生卒年不詳だが宣帝期（前七三〜前四九）の人、楊雄は前五三〜後一八である。
- 15 『漢書』地理志・下の記事は以下の通り。「壽春・合肥受南北湖皮革・鮑・木之輸、亦一都會也。始楚賢臣屈原被讒放流、作離騷諸賦以自傷悼。後有宋玉・唐勒之屬慕而述之、皆以顯名。漢興、高祖王兒子濞於吳、招致天下之娛游子弟、枚乘・鄒陽・嚴夫子之徒興於文・景之際。而淮南王安亦都壽春、招賓客著書。而吳有嚴助・朱買臣、貴顯漢朝、文辭並發、故世傳楚辭。」
- 16 梁孝王の文学集団については、『史記』梁孝王世家、『同』司馬相如列伝、『漢書』賈鄒枚路伝に拠る。
- 17 なお尧荣芝『两汉文学地域性研究』（二〇一二年、四川師範大学博士学位論文）も、地方で活躍した両漢の文学者について調査している。